仏(ほとけ)は常(つね)に

■楽曲データ

歌詞：『梁塵秘抄』より

楽曲：橘静雄　作曲

発表：―

初演：―

初出：―

管理番号：M1701

■創作の経緯

詳細不明。

■校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第２巻収録

底資料：『私たちのうた（２）』　浄土真宗本願寺派教学局布教部　1965年

比較資料：―

校訂の詳細：特記事項なし

■解説

仏は常に在せども

現ならぬぞあはれなる

人の音せぬ暁に

仄かに夢に見え給ふ

ほとけさまは、いつでも常にいらっしゃるのですが、目に見え手に触れることができないのは、何とも悲しいことです。けれども、人の声もしない静かな暁に、ほのかに夢のなかに姿を現わしてくださいます（筆者試訳）

この仏教讃歌は、『梁塵秘抄』の一首に作曲されたものです。『梁塵秘抄』は、平安時代末期、後白河法皇（1127～1192）の編集によって編纂された歌謡詞集で、巻一には今様（当時の流行歌）などを、巻二には当時民間で歌われていた信仰に関する歌（法文歌）などを収めています。また、口伝集には、日本の歌謡の歴史や今様の起こりが説かれ、平安末期のさまざまな種類の歌のうたい方や音律の記事、和琴の楽譜なども記されています。音楽史上貴重な文献です。

世のなかの実権が、貴族から武士へと移っていく戦乱の時代。人びとが何を願っていたのか、この歌から察することができます。目に見え、手に触れるものだけしか信じない人には、本当のほとけさまは見えないのでしょう。ほのかに夢のなかに姿を現してくださるほとけさま。そのほとけさまに出会える人は、すべての真実を見ることができるのでしょう。

親鸞聖人は、ご和讃のなかに次のように歌われています。

煩悩にまなこさへられて

摂取の光明みざれども

大悲ものうきことなくて

つねにわが身をてらすなり（註釈版聖典595ページ）

私たちは煩悩に眼をおおわれて、摂取してくださる如来の光明を見ることができないが、大悲の如来は少しも倦みつかれることがなく、つねに私たちを照らし護ってくだされる。（高木昭良訳）

このご和讃の心と通じるところが、《仏は常に》の歌詞にもあるのではないでしょうか。どうぞ、よく読んでみてください。

◆作曲者について

作曲の橘静雄は1900（明治33）年、長崎に生まれました。同志社大学で学び、音楽は山田耕筰に師事。ＮＨＫや朝日放送に長年関係し、交響曲や協奏曲、劇音楽などの作品があります。

◆歌い方について

この歌が詠まれた時代背景などを理解し、心をこめて丁寧に旋律を歌いあげてください。深遠な奥行をもった歌詞ですから、やわらかい発声を心がけましょう。跳躍する音程には十分注意して練習してください。

①4/4拍子の４拍目から始まる弱起の曲です。歌い出しはあまり強くなく、しかし言葉ははっきりと。

②ブレス（息継ぎ）の直前の音を乱暴に切らないようにしましょう。２・４・６・10・15小節はブレス直前が高い音なので、気を付けて。特に７小節目３拍目「ぞ」は、「あわれなる」という歌詞に続くので、最大の注意をしてください。

③全体的にソステヌートで（一つ一つの音の長さを十分に保って）歌います。音の動きはなめらかに。

④９小節目４拍目から11小節目にかけて高い音が続き、喉が固くなりがちです。力を抜き、やわらかい発声を心がけてください。

⑤９小節目は、「お」の母音が続きます。「音」の語頭「お」を軽く言い直しましょう。

⑥16小節目の発音は、「う」ではなく、直前の母音「お」をそのまま伸ばします。

解説執筆：大分哲照（御堂演奏会指揮者　福岡教区西嘉穂組明圓寺住職）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 17（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第 142 号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.